

第5回（仮称）新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議

日 時 平成21年4月22日（水）午後2時～3時30分

場 所 中央図書館3階 ビーンズホール

次 第

1. 開 会

2. 八木教育次長あいさつ

3. 議 事

（1）先進地事例紹介

政令市における「子ども読書活動推進計画」事業

（2）教育フォーラム2009「子どもの読書活動を進める市民のつどい」について

①進行案

②チラシ案

（3）合併地区学校図書館の視察について

①日 時 5月21日（木）午後

②視察先等 午後0時30分 中央図書館出発

1時30分 漆山小学校

2時30分 西川中学校

4時 中央図書館着

（4）その他

4. 閉 会

・出席者

委員：足立委員・荒川委員・佐藤委員・正道委員・高野委員・間藤委員・宮下委員

事務局：学校支援課仲川指導主事・栗谷川司書（坂井輪中学校）

中央図書館：八木教育次長・上山課長・持田補佐・子安係長

真島副主幹・真柄主査・餅谷副主査・金子司書

豊栄図書館：岩野館長・学校図書館支援センター長谷川副主幹（司書）

石原副主幹（司書）

白根図書館：石口館長

新津図書館：三田館長

西川図書館：松原館長・学校図書館支援センター加藤副主幹（司書）

・傍聴者 2名

1. 開 会

(司 会)

ただいまから第5回（仮称）新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を始めさせていただきます。本日は7人の委員全員が出席です。有識者会議は市民の皆様に公開しておりますが、本日、傍聴者は2人です。

開会にあたり、今年度就任しました八木教育次長よりごあいさつを申し上げます。

2. 八木教育次長あいさつ

(八木教育次長)

田中前次長の後任で、生涯学習センター・公民館・図書館などの社会教育施設の担当する。図書館長も兼務なので実質変わらない。変化の激しい時代の中で、市民の方々のニーズも多様化しており、社会教育の方向性をどのようにとらえればいいのか迷うことが多々ある。社会教育、生涯学習の面で微力ながら精一杯努めさせていただきたい。

(人事異動に伴う事務局職員の紹介)

3. 議 事

(1) 先進地事例紹介

政令市における「子ども読書活動推進計画」事業（資料1）

(事務局)

第2回有識者会議の後で佐藤委員から、ほかの市で取り組んでいる先進的な事例がないかというお話をいただいていた。政令市が子ども読書活動推進計画によって新たに取り組んだ事業とブックスタート事業について、政令市16市に照会し、事業名と簡単な内容だけを回答してもらったものを整理した。政令市の取り組みの傾向がある程度うかがえるのではないかと思うので、今後の論議の参考にさせていただきたい。

事業を大まかに5つのジャンルに分け、1啓発、2ブックスタート、3ボランティア、4学校、5推進組織とした。これは最初からそのように分けて質問をしたということではなく、政令市の新規事業をみていくとある程度グルーピングができるのではないかと考え、あとからまとめたものだ。従来からの事業を拡充するという回答の札幌市以外の15市の状況を見る。

① 啓発

多くの市で何らかの啓発事業を行っている。子ども読書活動推進法や国の計画、県の計画でも基本は啓発にあるということかもしれない。新規事業として予算がつきやすいというこ

ともあると思われる。イベントでは、新規事業として、講演会やフォーラムなどのイベントを行っている市が半数。来月、新潟市で行う教育フォーラムのようなものだ。

パンフレットやブックリストは現物を見ないと違いがよく分からないところもある。例えばさいたま市の「中高生向け本の紹介誌」・『小学生向け「としょ丸しんぶん」発行（年6回）」、神戸市の「子ども向け図書館報『としょ☆ぴか』（月1回）」など、図書館から直接子ども向けの通信のようなものを定期的に発行するという市がある。新潟市の図書館ではできていなかった年代向けの広報だ。子ども読書活動推進計画策定以前からこの種の取り組みをしている市も多いのではないか。新潟市では、就学前児童へのお勧め本を紹介したブックリストを以前から発行している。

「講座」は多くの市で取り組んでいる事業だと思うが、浜松市の「孫と楽しむわらべうた講座」は新しい取り組みのようだ。

子どもの読書活動推進法では、子どもの読書週間の初日の4月23日を「子ども読書の日」と定め、「国及び地方公共団体は、子どもの読書の日趣旨にふさわしい事業を実施するよう努めなければならない」としており、新潟市でもさまざまな事業を行うことになっている。これら多くの市町村で行っている事業に加えて政令市の新規事業では、千葉市の「ファミリーブックタイム運動」や、静岡市の「家族ふれあい読書の実施」など、家庭における読書の呼びかけが多いようだ。

有識者会議で論議があったメディアの問題について、新たに取り組んでいるという回答は今回なかったが、さいたま市が首都圏の都県政令市共同の取り組みとして、毎月23日をノーテレビ、ノーゲームデーにしようという呼びかけを行っている。

②ブックスタート

ブックスタートもしくは類似事業をやっているかどうかを回答してもらった。ブックスタートという事業名で、実際に絵本を手渡しているのは、さいたま市、静岡市など7市。対象年齢や対象人数などを入れておいたが、基本は、1歳未満児の保護者を対象に、絵本を1冊ないし2冊あげて、絵本の読み聞かせの大切さを伝えるとともに実際に読み聞かせを体験してもらうもの。ブックスタートの類似事業は、絵本をあげることはしないけれども、保健センターなどでの赤ちゃんの検診時や図書館などでブックリストや啓発リーフレットを渡し、ボランティアや図書館司書などが読み聞かせなどを行っているもの。類似事業をあわせれば、すべての政令市で、保護者に赤ちゃんへの絵本の読み聞かせの大切さを伝える取り組みを行っている。新潟市でも類似事業を行っている。

③ボランティア

ボランティアの養成・登録と研修・交流会というものが目立つ。新潟市も同じだが、計画以前からそれに取り組んでいる市が多いと思われる。地域における子どもの読書活動を進めるとき、ボランティアの存在はなくてはならないものになってきている。また、読み聞かせなどの読書ボランティア活動をしたいという希望者も多くなってきている。読み聞かせとボ

ランティア活動の基本を伝える入門講座の開催と、活動を行う中での疑問や悩みを抱えることもあることから、継続したステップアップ講座やボランティア同士の交流会なども求められている。

④学校

京都市の「学校図書館ナビゲーションシステム全校整備は、コンピュータによる蔵書管理や図書の貸出・返却が行われるシステムの整備、大阪市の「『言語力向上のための学校図書館活性化事業』は、学校図書館のボランティアの養成事業のようだ。広島市では、「読書活の全体計画・年間指導計画の作成」、「司書教諭等への研修」、「実践報告をインターネットにより学校へ情報提供」という事業、福岡市と北九州市では、学校図書館の地域開放が挙げられている。横浜市の「学校図書館環境支援」事業の平成19年度実績の3校について報告書を送付してもらった。市立図書館や教育委員会の職員、各学校のPTAやボランティアがチームを組んで学校図書館の環境をよくするというもので、中学校での夏休みの期間中に図書館電算化システム導入とレイアウトの変更の手伝い、小学校で学校図書館のレイアウト変更、小学校でボランティアのための読み聞かせ講座を行うというものだ。大阪市の「学校図書館支援モデル事業」は、各区で一つの小学校をモデル校として、PTAを中心として学校図書館の活性化に協力するボランティアを募集、研修会を実施して、図書の整備やディスプレイの作成など、子どもがより読書に親しめる環境を整える事業だ。堺市の学校図書館支援センターは、文部科学省の委嘱を受け、学校図書館支援センターのあり方について調査研究するモデル校を設定、協力員を配置して、学校図書館の整備や児童・生徒へのお話、読み聞かせ、ブックトークなどを実施するもの。新潟市の学校図書館支援センターと内容はかなり違うという印象を受けた。

神戸市では、小学校教員と市立図書館の交流会・合同研修会、広島市の「学校図書館の運営ボランティア確保」は、平日の午前と午後の交替で学校図書館の運営にあたるボランティアを各学校で10人確保するというもので、広島の計画の重点施策として挙げられている。

第1回の会議の新潟市における子どもと読書にかかる「現状と課題」の説明の後、正道委員から、「新潟市で学校図書館ボランティアが入っている割合が他の政令市と比較して低いのは、司書配置をしてきたためではないか」という質問があった。学校司書配置の状況をあわせてみると、たしかに学校において多くのメニューを新規に取り組んでいる市で、学校図書館に司書なしというところが多いという印象を持った。

⑤推進組織

新規事業として計画の進行をチェックする推進組織を設けていると回答した市が4市あった。

子どもの読書活動推進計画でどのような新規事業を盛り込むのかというとき、それぞれの市の取り組みの歴史や持っている資源の評価を行い、何を選択していくのかを考えていくことが必要なのではないかと。

(荒川座長)

学校の図書館司書の司書配置がなし、というのは本当にいないのか。

(事務局)

学校図書館に司書が一人もいないということだ。学校図書館を開けるためにボランティアをお願いするという取り組みの市もある。

(高野委員)

静岡市の「高校生読みきかせボランティア養成講座」というのは、高校生がボランティアをしてくれるということか。

(事務局)

そのようです。

(荒川座長)

政令市の調査をまとめた印象としては、全体としてよくやっているという感じか。

(事務局)

計画づくりの過程で何をするのかということが非常に大きいのではないか。これまでの事業を計画により確認することでも意味があるのだということも言えなくはないと思う。現状から、一歩でも二歩でも前に進むようなことができるのかどうかは、計画づくりの中で何をしていくのかにかかわっていくのではないかという気もした。

(荒川座長)

たしかに現状分析は必要で、そこからどのように考えるかということだ。

(宮下委員)

学校図書館運営ボランティアを導入している都市がいくつかあるが、ボランティアの方はどのような仕事をやっているのか。その場合、学校はそのボランティアの方たちとどうかわるのか。

(事務局)

1市ずつ詳しく話を聞いたり、場合によっては視察をしたりしないと、本当のところは分からないと思うが、大阪市の事例では、「子ども読書活動推進連絡会」を各区で開催し、大阪市全体でもう1回開催するという丁寧な取り組みをしている。その会議の中身をインターネットで公開している。それによると、それぞれの区でボランティアの方々の緩やかな組織を作っている。そこでボランティアの人たちが学校図書館を開くために努力しているということが分かる。昼休みに子どもたちが来るようにしたいということを熱心に発言されている。貸出・返却など実際に学校図書館に地域の人たちが入っていく中で、学校図書館をもう少し整備をしないとだめだという声があがっている。そういう意味では、一つのきっかけをつくっているのではないかという気もする。

(荒川座長)

「推進会議」を置いているところは、恒常的に置いてあるのか。

(事務局)

それぞれの中身をもう少しきちんと見ていかないと詳細は分からない。大阪市は毎年やると書いてある。名前だけの組織になることもままある。どれだけ外部の人たちが入っているのかとか、報告書があがっているのかなどもかかわってくるのではないかな。

(荒川座長)

これまで、この会議で委員から行政に対していろいろな提案や要望が出ているが、新しい事業の実施ということについて、事務局では今の段階でどう考えているのか。

(八木館長)

新規事業の提案をいくつか出されているので、事務局で考えていることを補足的に説明する。

足立委員から、学校における読書指導のため、公共図書館の資料整備を1クラス40冊単位くらいを団体貸出してはどうかということ提案をいただいている。いわゆるゲーム的な手法を使った、読解力向上のための「アニメーション」というプログラムを学校の読書指導に普及させたらどうかという趣旨かと思うが、図書館としても子どもの読書活動を進めるうえで有効な方法だと思っている。ただ、現在、学校の教育活動の中でアニメーションが必ずしも広がりを見せていない中で、公共図書館でまとまった形で資料を整備するということは、全体の資料費の関係から難しい面もある。図書館としては、当面は18館全館の中での資料の調達も含めて、順次進めていきたいと考えている。足立委員にはできれば引き続きご指導いただければと思っている。

ブックスタートの話が佐藤委員や正道委員から出ていた。政令市では17市のうち7市で実施している。また、県の資料では、県内では25市町村が実施している。新潟市では平成16年に次世代育成支援の行動計画の策定に当たり、子育て支援に関して市民にアンケートをとったが、優先順位が、ニーズからしても医療や保育の充実といったところが上位にあり、今年度も、市全体予算の目玉として、医療費の無料化や保育の充実などの施策を組んでいる。ブックスタートについては優先順位が低いということで、検討の中で一度落ちている経緯がある。福祉全体の施策からいくと優先順位が低くなるのだろうが、未就学児の読書活動普及のためにはいい事業なのだろうと私どもも思っている。

新潟市では1歳の世代が約6,500人ほどになる。つまり、6,500組の方々に、単に本を手渡すだけではなく、その有効性を説明し、読み聞かせもするという段取りができるかどうか、というあたりの方が予算確保という課題よりむしろ大きい課題なのではないかと思っている。

学校や保育園などへの資料の配送システムの整備ということについて正道委員から提案があった。所管は、学校については教育委員会の学務課、保育園は保育課で福祉サイドになるなど、施設によって多岐にわたる。施設の数でも、新潟市は学校が小中学校で171校、保育園、幼稚園が250園、子育て支援センターが30か所、ひまわりクラブが80か所、そ

のほかに児童館、児童センター、公民館などさまざまな子育て支援施設がある。「現状と課題」の中でも、調査の中では各施設とも、もっと本がほしいという声は読み取れる。配送システムをどうするかということについては、手法も含めて大きな検討課題だと思っている。

学校図書館の配送システムと抱き合わせになると思うが、学校図書館の蔵書のデータ化については、学校における教育システム全体をどうするかということで、かつて教育委員会で検討したことがある。そのときは、何十億という単位のお金がかかるということで、新潟市としては個別の学校内のLANの整備やパソコンの配備を優先させるということで、今の段階ではそのように進めている。

大きな問題として、正道委員や宮下委員からも話が出ている学校図書館支援センターと学校図書館の司書の問題がある。直接の所管は、教育委員会の教育総務課だ。今までも話してきたが、正規職員と非常勤職員という形で、旧新潟市では全校司書配置をしていた。合併地区では未配置だったことから、合併地区の学校に臨時司書を配置することにした。結果的に新旧の市域で格差が生じていることから、新市域に配置された臨時司書のレベルアップを図り、旧市のレベルに近づけたいということと、学校教育の中で、これまで以上に学校図書館の有効な活用を図っていくことを目指して、公共図書館の機能もあわせて「学校図書館支援センター」として組織的に、ベテランの司書から臨時司書を指導してもらう形で取り組んでいこうと決めたわけです。昨年度の西蒲区の西川図書館に続いて、今年は北区の豊栄図書館で試行することになっている。

政令市の比較でも、学校図書館司書を配置している市は非常に少なく、また配置していても、その中身を見ると、新潟市の臨時司書は週当たりの勤務時間数が一番長い。政令市の中ではその辺は進んでいる方なのではないかと思っている。この施策については人件費に多額の予算をかけており、理想論を言うときりがないが、図書館としては、この学校図書館支援センターをできるだけ充実する方向で学校図書館の活性化も図っていきたい、と考えている。

全体の補足になるが予算のかかりそうなものを中心に説明した。やらないとかできないとかということではなく、状況だけ説明させていただいた。

(佐藤委員)

ブックスタートができないという話だったが、私がこのブックスタートを導入したいと考えているのは、もちろん本を読んでもらうということも一つあるが、新潟市でも今年から保健師が孤立している親の中に入って行って保育指導をしようとしているが、半数が拒否をされているという状況で、今、お母さんたちは子育てをしている中で孤立している。そういうお母さんに入り込むツールとしてブックスタートができないかという思いがある。私も実際に乳児検診などをやっている、義務としては来るが、それ以上の指導などを受け入れないお母さんたちがいる。部屋の中で子どもとじっと向かい合っている構図が見えているので、ブックスタートのような形で行政がかかわりをもっていくことができないか。先ほどの説明では、実際に6,500人にどのように手渡していくのかという話だったが、逆にそうい

う行動をする中でもっとコミュニケーションができないだろうか。予算的な問題があるとは思いますが、難しいからこそ、子育て支援の一つとして位置づけていただきたい。

(八木館長)

もちろん、できないということではない。ブックスタートをやっているところを見ますと、おそらく「ブックスタート支援ボランティア」のようなものを新たに組織化して、かなり市民の方々のお手伝いをもらいながらやっているようだ。図書館をあげて、あるいは福祉保健センターをあげて、各区ごとに取り組むことになるのではないかと思う。やる方向で検討するとすれば、決してできないということではない。

(荒川座長)

学校図書館支援センターは頑張っているが、実際にどうなのか少し聞きたい。

(事務局)

西川図書館で1年やってみて、前回も少し話してもらったが、こういうことをやってこんなことが見えてきたというところを少し紹介してほしい。

(西川図書館長)

昨年度、西川図書館で初めて学校図書館支援センターが試行され、小学校と中学校の経験豊富な司書が2名配置された。西蒲区には小学校が15校あるが、まず実際に15校の図書室を見て、臨時司書、図書館主任、場合によっては校長先生と話をすることができた。中学校も同じように見て回った。長年司書が配置されていなかったため、図書の配置そのものが整理されていない。旧新潟市においては分類順にきれいに並んでいるのが普通だが、西蒲区では必ずしもそうではなかった。本を利用するための目録は、カードが多いが、コンピュータのところもあった。コンピュータで管理しているある小学校では、司書が配置されたときに、学校の先生方、保護者、臨時司書が協力してデータ入力をしたということだ。そういう学校では、学校内で学校図書館を利用しようという意欲が見られた。そこに学校司書が入ったので、非常にスムーズに運用されているように見えた。そういう学校では、支援センターの支援も有効なのではないかという感じを持った。

それ以外のところで感じたのは、本が活用されていない、本を貸出しすることもままならないということで、それは臨時司書が配置されただけでは好転しない。図書の整理についても、手間と長い時間がかかる。臨時の人が全面的にやったとしても何年もかかる。そんなことをすれば、それ以外の大事な教育活動で本来利用されるべき臨時の人のリソースがどんどん奪われる。そこではどういう支援方法が一番いいのだろうかということが課題として見えた。旧新潟市との差を強く感じている。

(荒川座長)

学校の図書館司書は一人なので、いつも孤独かと思う。そういう人たちが集まって話すようなこともやれば元気が出るのではないか。支援センターが集まって話をするようなことがあればいいと思う。

(事務局)

西川図書館の学校図書館支援センターでやったことは、まず現場を見て何が求められるのかというニーズの把握をし、年間の要所要所に交流会を設け、公共図書館職員と学校司書全員が集まって研修会や情報交換会をやった。西蒲区での試行にあたり、西蒲区の学校図書館支援センター運営協議会というものを設けた。西川図書館や中央図書館、西蒲区の小・中の校長先生や司書教諭にも入ってもらって、どのような運営をしていったらいいのかという話し合いをする場だ。昨年度の2回目の運営協議会の中で、小学校の校長先生から、西蒲区の支援センターができてどのようなところが変わったのかという話の中で、司書が研修に行ってくるたびに顔つきが変わっていったという話がとても印象的だった。どのように変わってきたかという、自信を持って仕事をするようになったと言っていた。新採用されても、今、現場の研修ができる体制になっていない。学校は教員の世界で、司書資格があるとはいえ、たった一人の職員が臨時で入っていても、それを現場で指導するような体制がつくられていない。それが、学校図書館支援センター職員が、実際に校長先生なりその司書に学校で会うということを経たあとで、支援センター主催の研修会や交流会をやっているということがあるのかと思った。司書の顔つきが変わってきたという校長先生が言っていたことは、多少過剰な褒め言葉なのではないかという気もしないでもないが、わりと素直に言っていたことがとても印象的だった。

(荒川座長)

学校の中でも司書をサポートする仕組みがあればいいと思う。

(足立委員)

資料1を拝見し、その後、新潟市の新規事業の説明を聞いていて思ったことだが、新潟市はこれまで学校司書を配置してきたので、それほどボランティアを頼りにしていなかったところもあると思う。それはすごく大きな財産だと思う。政令市でやっていることが参考にはなると思うが、新潟市でやるならだれがやれるかという「人の問題」を考えた方が早いのではないか。内容としてはボランティアがやっていることだけれども、新潟市だったら司書の人ができるかもしれないか。私は大学に勤めているので、大学生がかかわれるような事業はないのだろうか考える。せっきく財産として司書や、昨年度スタートした学校図書館支援センターなどをうまく活かして、この事業だったらだれがどのようにすればできるという形で、他の政令市で行われていることを読み替えていく整理があると、予算的にここまでだとか、忙しさからいってここまでだということが見えてくるのではないか。政令市の取り組みは、それぞれ本当にすばらしい事業だと思うが、もっと新潟市のよさを活かした取り組み方ができそうな気がする。

(高野委員)

先ほどのお話で、ブックスタートについては順位が落ちているということが言われたが、もっと年齢の月数が少ないうちから近くの保育園なども利用しながらやっていくことも大事

なのではないか。大もとはもちろん市でやっていかなければいけないと思うが、私たち保育園の協力も必要なのではないか。

(間藤委員)

ブックスタートの話が出たが、このような本を配るとするのは、新潟だけではなくていろいろなところでやっている。その際、配られたものがどのくらいきちんとした形で利用されているのかというアフターケアがなされているのか。また、予算にみあっただけの効果が果たしてあるのだろうか。その反応を見てみたらどうかと思っているので、そういうことができないのだろうか。それがあつたらもっと自信を持ってやれる。あるいは足りなかったら、ただ配るだけではなくて、その辺のアイディアはとても大切ではないか。

小さいときからわざわざしなければいけないこともないような気もする。お母さんの気持ちに少し余裕が出てきたようなときに、本というものに目を開かせていくということでもいいではないか。ただ単にこういうものはどこでもやっているから、流行みたいになっているのもどうかなという気がする。

(高野委員)

やはり絵本というのは親子でかかわる第一歩だと思う。今のお母さん方を見ていると、育児に悩んだりという方がいる。絵本を媒介にしながら、楽しんで子どもとかわることは温かくいいのだということ伝えていけば、やがて読書などにも興味を持っていくのではないかと思う。だからそのあたりは是非とも力を入れていきたい。

(間藤委員)

絵本がいないというわけではない。どのようなところという絵本を利用できますという、今言われたような形でやることによって、いくらでも活かせるのではないか。

(佐藤委員)

高野委員が言われたように、3か月というのは大事な時期だ。逆に3か月だから受け入れてくれる部分もあるので、早い時期に親を勧誘していくということもとても大事なことで、小児科医の立場としては思う。

(荒川座長)

お話を聞いていると、お母さんが主役で、お父さんの出番がないような感じもする。

他の政令市の状況が分かり、新潟市の意欲や苦勞も分かった。このうちの一つでも実現してほしいと思う。

(2) 教育フォーラム2009「子どもの読書活動を進める市民のつどい」について

(事務局)

教育フォーラム2009「子どもの読書活動を進める市民のつどい」を5月30日に開催する。資料3は、これから配付するチラシのゲラで、完成版ではない。5月30日(土)午

後1時半から4時半までの3時間の日程で、会場は新潟市民プラザ。会場の定員は500人。

基調講演は、ノンフィクション作家の柳田邦男さん。「今こそ、絵本の力～子どもの成長、大人の再生のために～」と題して講演していただく。柳田邦男さんは近年、携帯電話やインターネットが子どもにもたらす害や絵本の持つ力、とりわけ大人にとっての意味などについて各地での講演、著作、テレビ、ラジオなどで訴え続けている。

講演の後、「子どもの読書活動を進めるために」と題しパネルディスカッションを行う。パネリストとしてこの有識者会議から足立委員、高野委員、佐藤委員、宮下委員から参加していただく。講師の柳田邦男さんはアドバイザーとして参加していただき、コーディネーターを篠田市長が務める。

チラシの裏面には、パネリストとして出ていただく4人の委員の写真とプロフィールを掲載させていただく。

資料3の2は、5月30日の当日に配付するもので、裏面に有識者会議委員7人全員の写真と100字程度のメッセージを掲載させていただく。

資料2は、当日の進行スケジュール案。開会あいさつのあとの基調講演が90分、15分の休憩をはさみ、パネルディスカッションは70分。パネルディスカッションのテーマは「子どもの読書活動を進めるために」としているが、今何が必要なのかというあたりに絞っていきたいと考えている。4人のパネリストの方々に、最初に、柳田邦男さんの講演を聴いてどのような感想かを3分程度ずつお話しいただいたあと、本題の、子どもの読書についての現状認識と提案をそれぞれ7分くらいで話していただく。有識者会議委員のうちパネリストとならない荒川座長、正道委員、間藤委員の3人の提案について、宮下委員から3分程度で紹介していただきたいと思っている。

ひととおり発言が回った後、委員とアドバイザーを含めての意見交換。アドバイザーからは最後に、休憩時間中に会場からいただいた質問への回答も含めて5分程度発言をいただき、最後にコーディネーターがまとめをするという段取りで考えている。

このようなことで進めていきたいと思うが、これでいいかどうかも含めてご発言いただきたい。

(荒川座長)

私は国際会議の都合があり参加できない。大変申しわけないが、宮下委員はじめ皆さんにお願いしたいと思っている。

(八木館長)

かなり分刻みのような、細かい感じがするかもしれないが、大まかにご承知おきいただいた方が分かりやすい面もあって、あえてこのようにさせていただいた。これで決めたということではないので、ご意見があればうかがいたい。

(荒川座長)

市長がコーディネーターというのは迫力があるのではないか。是非、4人の方々には思いのたけを話していただきたい。大体どれくらいの方が集まる予定か。

(八木館長)

会場が最大で540席で、おそらく学校関係者、保育園・幼稚園関係者、一般の方ということで、満席になるだろうと思っている。

(荒川座長)

私は今市民大学の学長をしており、3月に公開講座をやったが、今年は満席だった。当日欠席者も出ることを考えて多少余計に確保したが、ほぼ満席で終わった。今年は武田鉄矢が来るということで大変人気があった。

(八木館長)

もう少し大きな会場をとも思ったが、柳田先生の都合と会場の関係でこの日しかとれなかった。

(荒川座長)

あの会場はいい。親近感があるというか、聴きやすい、話しやすい場所ではないか。それでは、これはパネリストの皆さん方に頑張ってもらいたい。

(八木館長)

事務局から言うのも口はばつたいが、それぞれの皆様がこれまで発言してこられたことをそれぞれの立場で、特に団体推薦ということでお願いした委員には、そういったバックヤードも含めて、市民の方々に日頃考えていることをメッセージとして伝えるような形で、思う存分しゃべっていただきたい。

(荒川座長)

私などもまさに素人だが、この会に参加して初めて現実に動いている仕組みや皆さんが苦勞されているということが分かったしだいだから、たしかに関係者以外の方ではなかなか難しいかもしれない。そういうことも含めて、是非満席になればいいと思う。

(八木館長)

大人はこうあってほしいとか、私たちはこうしたいといった切り口で話していただくとありがたい。

(荒川座長)

是非そうしていただきたい。

(正道委員)

これはどのような形で皆さんに知らせるのか。

(八木館長)

このチラシと「市報にいがた」を基本に考えている。小・中の校長会には話してある。学校の関係では、教職員のほかに、学校に入っているボランティアや学校評議員の皆さんにも声がけいただければと思っている。

(事務局)

5月3日の「市報にいがたに」掲載する予定にしており、一般市民の方、学校の先生方も含めて5月3日からコールセンターで受付たいと考えている。

パネリストの4人の先生方やパネリストではないほかの有識者の委員も事務局の受付においていただきたい。

(佐藤委員)

講演はスライドなどは使わないのか。

(事務局)

柳田邦男さんはプロジェクターを使用するという連絡をいただいている。有識者の皆さんもどのような形で発言するのか、この会議終了後に少し打ち合わせをさせていただきたい。

(3) 合併地区学校図書館の視察について

(事務局)

第3回、第4回と、この近隣の保育園・小学校・中学校を視察したが、第4回懇談会で正道委員から、中心地区の学校だけではなく、合併まで司書配置されていなかった合併地区の学校図書館を視察したいという希望をいただいたので、それを受けて計画した。

日時は5月21日(木)の午後。視察先は西蒲区の漆山小学校と西川中学校を予定している。両校は、昨年度、西川図書館に設置した学校図書館支援センターの運営協議会の委員を両校の校長先生と司書教諭の方をお願いしている。そのようなこともあってお願いしたところ、快く受けてもらった。これについては有識者会議の正式な取り組みということではなく、自主的な勉強会と位置づけさせていただきたい。参加できる方はお申し出いただきたい。

(荒川座長)

予定している時間はまだあるので、この際、今までの検討を踏まえて何か意見があればお願いしたい。今まで5回の会議のなかで大分問題点が明らかになったが。

(事務局)

足立委員は有識者会議には2回目の出席なので、提案をいただいていることについて、もう少しお話しいただきたい。

足立委員からは、第2回の会議の中で、アメリカの学校図書館と公共図書館の連携の話や、足立委員が新潟の教員研修や自主研修の中で、同じ本を子どもたちに読ませて、それから授業を展開していくことについての紹介等があった。一度聞いただけでは、現場を知らない者にとってはなかなか分かりにくい点もあるし、これまで公共図書館はどちらかという学校から言われたものは出しますという感じで、提案するという形での学校とのつきあい方をしなかつたと思う。これまでそういう関係ではなかつたところに、提案するなり用意するときに、それはある程度学校側の「耕し」みたいなものがあって初めて出会うことができる

のだろうという気もするが、その辺も含めて、どのようなことが考えられているのかについて、もう一度お話いただきたい。

(足立委員)

3月9日に図書館の方が私の研究室に来て、私が話したいことを聞いてくれた。そこでどのような話をしたかという、先ほど話にもあったように、40冊の同じ本をただ貸すのではなくて、こういう読ませ方をしたらどうですかという提案を含めて学校の先生方に提案していただきたいということだ。私も教員養成にかかわっているが、特に小学校の教員はとても忙しくて、しかも教員養成の段階で子どもの本についてカリキュラム上しっかり勉強する機会がほとんどない。宮下委員のようにその取り組みをされている方もいるが、やはり本に強いのは図書館の職員だ。そういう人から、このように読ませたら読む力がつくという提案をしてもらえると、なるほど、そういうものかと受け入れることはできる。私の方でいくつかそういう手法を開発なり用意して、それを使っていただけることあればそうしていただきたいということを申し上げた。一つは、先ほども話が出たが、「アニメーション」といって、40冊の同じ本を子どもたちに事前に配って、好きなように読んでいいと言う。読んできたところで、子どもたちが集まって、ゲームみたいなことをする。ゲームの中には、こういうふうに読めば上手に読めるのだというヒントのようなものが入っている。それを何回も繰り返しながら、子どもたちは上手に読めるようになっていくというものだ。

別のやり方で、「リテラチャー・サークル」というやり方がある。例えば40人学級だと5冊ずつセットがあるとすると、8種類の本が紹介される形になる。8種類のうち一番読みたいものを子どもが選ぶ。本を読みたくないと思っている子どもでも、8冊の中で一番読みたい本を選ぶわけですから、いくらかは読みたい気持ちになるというわけだ。同じ本を選んだ子どもたちが5人集まってグループをつくる。好きな本だから集まったので、レベルはいろいろとある子どもであっても、少し違った役割、例えばその本を読んで思い出したことを書きとめてくる役割の人とか、疑問に思ったことを書きとめてくる人、目に浮かんだイメージを絵に描いてくる人、まとめをしてくる人など役割分担をする。違う役割をしてるので、どの人が優秀でどの人がだめだということが分からないような仕組みで読み進めていく。自分の役割は自分一人で読んでこななければいけないので、責任を持って今日は何章から何章まで読みましょうみたいにして、読んできたものをみんなで集めて、そのことについて5人なら5人のグループで話し合いをするという手法だ。

こういった手法なども、私は近い学生には話したりするが、やり方を知っていれば、本を紹介してしまえば子どもたちが動き出すので、どんどん読書が進んでいく。そういう手法が分からないと、どうしたらいいものなのでしょうかとなってしまう。少し言葉が足りなくてこれまで十分に伝えられないところもあるかもしれないが、市の図書館をとおして、読書指導のいろいろな手法を教員に提案するということをしていただきたいと話した。

(宮下委員)

フォーラムのテーマは、「子どもの読書活動を進める市民のつどい」ということで、子どもたちが読書活動を進めるための市民のつどい、双方が理解できたり、応援ができたり、ヒントが得られたりというつどいだ。読書活動とは何だろうといったときに、本を読む子にしたいということ、本を読むことをよろこぶ子どもにしたい、本を読むことを楽しみにする子どもにしたいということだと思う。先ほど足立委員から話があったが、本を読む力を持った子どもにしたい。さらに、そういったことをトータルに発展させると知的なものが高まる子どもにもしたいし、情操的なものもしっかり身に付けた子どもにしたいという流れの中で、子どもの読書活動というものが考えられるのではないかと思っている。

私の立場から言うと、小学生があんなに読んでいのに、中学生はなぜ読まないのか。そこが弱いのではないか。その場で解決はしないまでも、あるいは提案がないまでも、そのところにふれる必要はあるだろうということを思っている。

その原因は何なのかというところを考え、その手立てを持った計画を立てないといけない。本を読む子どもなどは、ある意味、小学校の段階においては簡単に育つ。競争させたり、楽しいだけの本を読ませれば、けっこう読むようになる。どのくらいを目指すかといえば、私はかつては1年間に平均して80冊くらい読めればいいのではないかと考えた。低学年はもっと多いし、高学年は50冊くらいかな、6年生になると忙しいから40冊くらいかなという範囲の中でだ。しかし、中学校へ行って10冊とか10冊以下というのは問題があるということだ。

私が思っている以上に新潟市の子どもたちは読んでいる。政令市の子どもと比べて新潟市の子どもたちがどうなのか。また質はどうなのかというところの何かが必要ではないか。そこら辺のところをもう少し煮詰めていかないと、本当の意味の読書推進にはならないのではないかと思っているので、計画を立てる段階でそのようにやってほしいと思う。

フォーラム当日の役割分担で、そこに少しでもふれるとしたらどういう形でふればいいのかというところが私も悩みだ。

(荒川座長)

宮下委員がお悩みのところは、小学校から中学校へいったときの実態だが、それは原因もあるし何か方策もあるのか。

(宮下委員)

中学生の読書量の減少は何が原因なのか。あるいは今まで司書がいなかった合併地区の学校が司書を入れたら利用が増えたというが、何の要素で増えたのか。司書のレベルはさまざまだ。図書館を開館したから利用が増えたのか、あるいはそこに何か質の高い働きかけ、質の高い本を読ませたのか、学校が変わったのか、そこら辺のところは何も分からないで私たちの協議が進んだような感じがするので、そこら辺のところをもう少し煮詰めてほしいと思っている。

(荒川座長)

大学入試センターで仕事をしていると、国語というのは脳の思考過程の道具というか、全ての学科の基本だ。それが分からなければほかの学科も分からないということで、非常に大事だ。数学者の藤原正彦さんや岡潔さんはよく国語は数学的であると言う。岡先生などは、数学は情緒の表現であると言っている。全ての学問の中心だ。中学へいくとおそらく受験勉強のためにほかの科目に追われているが、そういう中でも、ある意味道具として学んだ国語ではあるけれども、国語をとおしてさらに発展するのだという教え方が必要だ。そこで読書が続けていけば、本当に幅広い人間性を獲得されるのだろう。そこが一番のキーポイントなので、是非、委員の方々にそこを議論していただきたい。非常に難しい問題ですが大事だと思う。まして高校になってくるとどうか。藤原正彦さんは高校のときにもっと読めばよかった、古典などを読んだらもっといい数学ができたと言っていた。小学校の英語なんかとんでもない、というようなことを言っている。

(佐藤委員)

私は専門外で、司書とボランティアがどのように違うのか分からない。例えば小児科医のかかわりでいうと、官制の子育て支援センターをどんなに充実しても、お母さんの方から自然発生的なサークルや子育て支援のグループというのは出てくる。行政がきちんとトレーニングした保育士を配置して、保育士がこういう子育て支援をしますということを提案しても、それでは満足しないお母さんはいる。同じように、司書をきちんと充実すればそれで全部満たされるかという、やはりボランティアの立場というのはとても大事なのではないかと漠然と思う。司書を配置しているから、ボランティアがレベルが低くて司書の方がレベルが高いかといえば、必ずしもそうではない。見方が少し違うのかもしれないが、その辺のバランスがとればもう少しいいのではないかという気がする。

(事務局)

最初の「現状と課題」の中でその辺を書き込んできたつもりだが、例えばブックスタートに非常に先進的に取り組んでいる北海道の恵庭市というところがある。人口は新潟市の10分の1くらい(6万8千人)。恵庭の市長は元恵庭市立図書館の館長だった人で、自ら読み聞かせをする方だ。そこでの図書ボランティアは400人いるそうだ。「現状と課題」で出したが、新潟市の図書館が把握している、図書館や公民館で活動している読書ボランティアは368人。単純に言うと、10倍の人口だから、新潟市ではボランティアを一桁多く用意してはじめてブックスタートというものが力のあるものになっていくのではないかという気がする。

すべてを司書が担うというのはまったく無理な話だが、今回のまとめでもそう思ったが、やはり必要なところに必要な専門職がいると思う。それをさらに豊かに、その可能性を広げていくためには、もっとたくさんの市民ボランティアが必要ではないか。そういうことが子どもの読書活動を広げるというイメージなのではないかと思う。ボランティアと司書が対立するものではなく、ともにつくっていくものだと考えている。

(間藤委員)

正道委員の推薦で、『山に見える学校図書館から』という司書の方のエッセーを読ませていただいたが、正道委員がなぜこういうものを推薦されたかということがよく分かる。これだけの司書がいる学校では、例えば読書活動がどうだったかとか、司書が活かされるような形での学校運営がされているのか、その辺を知りたいと思った。司書は立派でも、ほかの先生たちにその情報が伝わっていなかったり、エッセーとしてはおもしろいけれども、そこが活かされていないだったら残念だと思う。

(荒川座長)

学校の先生方のサポートということも絶対に必要だと前から思っているが、そういった仕組みがあればいい。

(正道委員)

私がこれ（『山に見える学校図書館から』）を皆さんに読んでほしいと思ったのは、先生に向けてまでアピールして図書館について知らせているという司書もいるということで、少し珍しいと思ったからだ。図書館の司書は、「図書館だより」として、家庭や子どもたちに本の紹介や図書館の説明をしていることが多いが、先生に向けて、あるいは校長先生に向けてもアピールしている司書の仕事は初めて見たので、皆さんに紹介した。

(事務局)

そのことについて少し補足させていただくが、筆者は合併地区の小学校の臨時職員の司書で、司書教諭の資格を持っている。新潟市内で司書教諭の資格を持っている臨時職員の学校司書というのは3人くらいだと思う。そういう意味では司書とは視点が少し違うと思われる。ご自身も、自分の活動が必ずしも新潟市の司書の一つのモデルとは言えないと思うし、自分なりのやり方であるということをご理解いただきたいと言っている。

(4) その他

(事務局)

教育フォーラムのパネリストの方は、この会議終了後、当日の打ち合わせをしたいと思いますので、そのままお残りください。

(荒川座長)

これで終わりたいと思います。フォーラムの方はよろしくお祈いします。

(司 会)

第5回（仮称）新潟市子ども読書活動推進計画策定有識者会議を終了させていただきます。ありがとうございました。